

3. 調査研究

フランス競馬のポイント

(財)競馬国際交流協会 参与 真田 昌彦

1. 競馬の概況

フランスで競馬が本格的に開催されるようになったのは19世紀前半(1833年)で、馬も人もルールも全て、400年前(1600年代)から行われていたイギリスからの直輸入であった。ついでに言えば、ボート、ボクシング、ラグビー、サッカー、テニス、ゴルフ等もイギリスが発祥国で同じころ世界的に広まったものだ。

2世紀遅れてスタートしたフランス競馬はイギリスの悪弊を教訓に、賢くも、1891年法で競馬協会だけに、パリミュチュエル方式の馬券のみを場内発売にかぎって法許して、ブックメーカーと違法賭事を駆逐した。さらに1931年法で、この法許を場外発売に拡大した。1954年チエルセ馬券(3連勝単式馬券)を考案し、さらに売上を大巾にアップさせた。その後も5連勝単式馬券や勝馬投票のコンピューター化によって馬券の売上を伸ばし(2002年8,915億円、1998年から5年間インフレ率12%にもかかわらず売上25%増)今日も好調に推移している。

2. アメリカ人の貢献

国の取り分の多さが問題にされてはいるが(13.38%)、馬券の売上から控除された資金が競馬にも還元されて賞金を潤沢にし、さらに馬産の保護のために、フランス産馬について多額の馬主賞、生産者賞が交付されること、馬の生産 競馬 調教に適した肥沃で平らなスペースに恵まれていること、パリという世界一美しく、自由に人生を享受できる都市があることなどが原因で、20世紀初頭から従来の貴族や大地主に代わって、ビジネス界の成功者やお金持ちが国の内外を問わずフランスの競馬と生産界に参入するようになった。とりわけ、19世紀末に驚異的な産業の発展により巨万の富を蓄えたアメリカのいくつかのファミリーの参加

の影響は大きかった。こうしてアメリカ人馬主の活躍は、20世紀初頭から始まった。ベルモント家、デュリア家、グールド家、サンフォード家、ヴァンダービルト家、フィットニー家、ワイドナー家等々が2つの世界大戦の間にフランスで大活躍した。活気のある独自の気風と強固な資本力による活力をもって、真に価値ある刺激となったこれらアメリカ人の厩舎と馬生産は、単に現在も続くいくつかの重要な牧場ばかりでなく、生来の弱気を捨てて立ち向かわざるを得なかったフランス人との実りある競争を生み出した。

フランスの駈歩競馬に急テンポで国際的な巾を持たせ、その結果、フランスの競馬番組に組まれた選別競走の中で成功を収めた馬に大きな価値が生まれたのは、こうしたアメリカ人の刺激的な存在があったからであると言える。

3. 生産の概況

馬生産の中心地域は、かつてヒットラーがヨーロッパの穀倉地帯にしようとしたと言われるノルマンディ地方である。サラブレッドは2002年には生産者数3,800名余、生産頭数4,272頭でトロッターの7,735名、10,671頭のおよそ半分の規模である。フランスではサラブレッド生産者は、使役馬、障害馬（セルフランセ）、ポニーよりも少ない。繁殖牝馬6頭以上のサラブレッド生産者は184名で1~2頭しか牝馬のいない生産者が83%を占めている。

馬生産に対しては現在でも19世紀初頭にナポレオン1世が敷いた管理体制の原型が存続している。馬産は農務省馬政局とその下部機関である23の国立種馬所の管轄下にある。これらの種馬所は血統書を管理し、小規模生産者のために競馬の益金で、種牡馬を購入して繋養し、品評会を開催したりして、生産者へ金銭的助成あるいは技術的指導を行っている。

種付け頭数の制限

人工授精は、フランスでは、牛に次いでトロッターにも利用されるよ

うになったが、世界中の競馬国と同様にサラブレッドの生産には相変わらず使用されていない。フランスでは 20 世紀初頭にはサラブレッド種牡馬は 1 年間に種付できる牝馬の頭数を 40 頭までに制限していた（種付初年度は 30 頭）。1999 年には種付頭数は 1 頭につき 100 頭から 150 頭までに制限が緩和された。ただし、（税法上）農業者とみなされる生産者が所得を増やそうと思えば、南北半球を結ぶシャトル便のお陰で所有する種牡馬を年中働かせることもできる。

4. フランスに入ったアメリカの血統

オーガスト ベルモント、W.K.ヴァンダーヴィルト、特に H.B.デュリアーといったアメリカ人がフランスに開設した自分の牧場で繋養するために輸入した繁殖牝馬を通じて 20 世紀初頭から、フランス馬の中にアメリカ馬の血統が混ざり始めた。これらの輸入繁殖牝馬の子孫によってピエール ヴェルテイメールはエピナール（Epinard）を得、マルセル ブーサクはトゥルピヨン（Tourbillon）を生産できた。

1950 年代初頭には 5 頭の種牡馬がアメリカから輸入された。そのうち、フランソワ デュプレが輸入したレリック（Relic 1945）は大成功した。同馬は 2 歳時に活躍したがその後負傷して引退した馬だった。ウイ牧場でレリックは 1951 年から 1956 年までの 6 年間に 1 ダースの種牡馬と比類ない繁殖牝馬リランス（Relance: マッチ Match、レルコ Relko、リライアンス Reliance の母）を生む。産駒は皆、早熟でスピードをそなえていた。

これらの繁殖用馬の輸入直後 P.A.B.ワイドナー夫人がエチエンヌ ポレの厩舎に送り込んだアメリカ産馬がフランス競馬に登場した。ネプチューン（Neptune 1955）、ダンキューピッド（Dan Cupid 1956）、フラダンサー（Hula Dancer 1960）、ブルートム（Blue Tom 1964）等は 2 歳時、合計でルボワ賞 5 回、ロベール パパン賞 2 回、モルニイ賞 3 回、ラサラマンドル賞 4 回、ルグラン クリテリウム賞 2 回、ラフォレ賞 1 回の勝鞍をあげた。エチエンヌ ポレの巧みな調教を受けたこれらすべての馬たちは早熟で、サラブレッドにとって最も重要で根本

的な資質であるスピードを有していた。

全員が中距離ランナーとして優秀な成績を挙げた。その中でダンキューピッドはル ジョッケイ クリユブ賞でエルバジェ (Herbager) に僅差で敗れはしたが、クラシック距離も完璧にこなせた。

ピエール ヴェルテイメール夫人のためにアレック エッドが購買した当歳馬リヴァーマン (Riverman 父 Never Bend) と 1 歳馬リファール (Lyphard 父 Northern Dancer) の “ アメリカ製 ” 牡馬は 3 歳になってその優秀な素質が一大開花し、種牡馬としても大きな貢献をした。

1967 年、ル グラン クリテリウムでのサーアイヴァー (Sir Ivor) の目の覚めるような優勝はアメリカ産馬の実力について最後まで懐疑的だった人々をも納得させずにはおかなかった。さらに、2 頭のアメリカ馬が旧大陸でその名を上げた。1970 年、ニジンスキー (Nijinsky 父 Northern Dancer) はイギリスで三冠馬の栄冠を手にした。また 1971 年、ミルリーフ (Mill Reef 父 Never Bend) はダービーと凱旋門賞で優勝を果たし、ヨーロッパの代表馬を粉砕した。英国、フランス両国は同じ結論にいきつく。つまり、アメリカ馬産は師匠であるヨーロッパ先進国を追い越してしまったのだ。それは半世紀にわたり改良を続けたアメリカ馬産の成果を物語っていた。アメリカ馬産レベルアップの要因のひとつは、レースのどれをとっても最高に厳しい選抜が行われていることである。アメリカではレースは発走直後からスピード走行が持続する。つまり猛スピードでレースが展開するのである。だからいくらかの稀な例外はあるとしても最もスピードのあった馬が勝者となる。一方ヨーロッパでは、とりわけフランスでは、最後の直線がはるかに長いこともあって、レースでは待機作戦がとられる。従ってアメリカの場合とは大変異なるわけである。戦術上の配慮や、走行中の運 不運といった要素のために多くのレースが競走馬の真の実力どおりの結果にはならない。勝馬は幸運だったからで最も実力があったからではないのだ。レース結果が馬の実力を最大限裏づけ証拠となり、新しい血統の馬でも “ 最高のサラブレッド改良用馬 ” となることが出来たことがアメリカ馬の最高の強みであった。フランスの厩舎と牧場にアメリカの優駿を導入したのは賢

明だったと評価されている。しかしもとをたどれば、旧大陸がアメリカ競馬の初期に供給した馬のおかげでもあったのだ。とりわけフランスから輸入されたサーギャラハッド(Sir Gallahad)、ブルドッグ(Bull Dog)、プランスキヨ(Princequillo)がアメリカ馬の血統形成に果たした貢献は大きい。

かくして、アメリカの繁殖馬はヨーロッパの牧場に押し寄せ始めた。それらの馬は玉石混交だったが、量的にも質的にも、ノーザンダンサー(Northern Dancer)の子孫が圧倒的多数を占めた。

5. 長距離馬生産重視の風潮

1995年にラベイドロンシャン賞(G 1,000m)で外国馬が再び勝利した後、ベルナールバルーシュは「クウルス エ エルヴァージュ」誌でフランスの短距離競走のみじめな状況を次のように認めている。「フランスの大馬主 生産者は純粋なスピードの追求に次第に興味を失った。そして小規模生産者は安上がりで、しかも、儲かる商品(馬)なのに、この未開拓分野に進出することに、あまり熱意を示さなかった。そのことが1975年以降、半恒常的にイギリスからの遠征馬の独占的支配を許すことになった」。このように「スピードはフランスでは尊重されない」というタイトルの論文が1970年に同じ雑誌に掲載されて以来現在まで状況はほとんど変わっていない。そのために、フランスの生産者は繁栄するはずの市場を失っている。長距離馬の生産は大切に維持すべきフランス馬産の特色であると確信して、いまだにそのことに重きを置く風潮が強い。フランスの競馬史家、ギイチポーは次のように書いている。

「長距離競走(2,800m以上)は、かたつむりのような速度でレースが展開しなければ、おもしろいスペクタクルとなる。しかし、良い馬を選別する上では意味を持たない。客観的に見ると、ひとつの長い平坦な曲線で表現できる。加速することなくいつまでも、規則的に続く勢いのない走行である。これらの要素は、勝利の決め手となる最後の瞬発力を

持ちつつ、かなりの距離を直ちに、最初から十分なスピードで走破できる能力としての持続力と区別される点である。逆に、スピードは積極的な要素であり、極めて短時間に最速走行に移行する機能で、ほとんど完璧に近い循環器、呼吸器、運動器を有することが馬に要求される。スピードは同一水準で、1,400m までしか持続しない」。

「フランスにはスピードを伝える繁殖馬が必要だ。それは、第 1 に 1,600m と 2,400m の距離の選別競走のトップホースであることを示す決め手である瞬発力を産駒にそなえさせるためであり、第 2 には、両親とも短距離馬の配合によって産駒にスピード力を伝えるためである。なぜならば、スピード力は世代を経るにつれ次第に弱まり、最後は消滅してしまわないように培われ維持されなければならないからだ。逆に、長距離馬のほうは、そうしたいとする理由はない。選別競走に敗れた馬から、いつでも、大量に補充できるからである」。

(平成 16 年 1 月 20 日記)